

司会：小川利康（早稲田大学）

A-1 日野杉匡大（北海道大学大学院文学研究科 DC3）

「蘇曼殊『断鴻零雁記』における一人称語りについて」

A-2 高峽（名古屋大学大学院文学研究科 DC3）

「上海で人力車夫であること——施蛰存「四喜子底生意」について——」

A-3 池田智恵（関西大学 GCOE 研究員）

「1940年代における探偵小説について」

A-1 (10:00~10:50)

蘇曼殊『断鴻零雁記』における一人称語りについて

日野杉 匡大

清末から民初にかけて活躍した奇僧・蘇曼殊（1884-1918）の書いた6篇の創作小説のうち、もっともよく知られているのは、『断鴻零雁記』（全27章。1911-12年執筆。1919年刊行）である。

『断鴻零雁記』では、河合三郎なる中国育ちの日本人が僧となったその日から、彼がふとした偶然によって生母の消息を知り、母を尋ねて日本へ渡り、さまざまな曲折を経て、ふたたび中国へ戻ってくるまでが描かれる。

物語は、すでに中国に戻った三郎の一人称語りによって、ときに自身の心情を挿し挟みながら回想される。また、小説中には作者・蘇曼殊を思わせるキーワードや要素が散りばめられている。こうした仕掛けによって、この小説は多くの読み手から、蘇曼殊の「自伝的」小説として読まれることとなった。

たしかに、蘇曼殊は身近に材を取ることの多い作家であり、『断鴻零雁記』から「自伝的」性質を読み取ることもできよう。しかし、それは数多ある読みのモードのひとつに過ぎないのではないか。

そうした問題意識のもと、本報告では、『断鴻零雁記』の語りの特徴について、同じく一人称語りを採用した「絳紗記」（1915年）、「碎簪記」（1916年）と併せて考察する。また、符霖『禽海石』（1906年）など、他作家の一人称小説との比較も試みる。

上海で人力車夫であること — 施蛰存「四喜子底生意」について

高 峽

1932年は、中国における近代都市文化の進展にとって象徴的な年であった。1932年の『中国文芸年鑑』（現代書局、1933）では、「都会主義の文学」の出現を中国文壇の新しい現象の一つとして指摘している。上海における「都会主義の文学」の出現は、上海というモダン都市の発展と大きな関連がある。

アヘン戦争後に開港され、猛烈なスピードで1930年代に世界屈指の大都市に成長した上海は、「西洋衝撃」として語られる中国近代史のもっとも象徴的な存在だと言える。しかし、上海はまた移民の都市で、その大半を職を求めにやってきた農民が占めていた。だが、近代化が遅れた中国では、過剰人口を工業に吸収することは出来なかった。呂漢超によると、上海には1930年代に10万人もの人力車夫および2万人から2万5千の乞食」がいたという。このような状況からは、上海におけるモダニティの探求に一層困難をもたらしたことが想像できよう。

1930年代に上海で活躍したモダニスト作家施蛰存（1905-2003）は、このような不均等なジレンマをもっともよく描き出した作家の一人である。1932年という都市経験を言説化する象徴的な年に書いた小説「四喜子底生意」は、上海の「裏面」的存在として看做される人力車夫を主人公に据え、その視点を通して上海のイメージが語られている。小説の主人公四喜子は、地方から上海に来た出稼ぎ労働者である。農民移民の都市との遭遇は、農民に新しい主体性の感覚を獲得させ、中国におけるモダニティをめぐる問題の重要なアフターになったのである。

本発表は、1930年代の都市の対自化という流れに作品を位置付け、四喜子という地方からの新たな都市移民の都市経験をどう捉えるべきかを検討する。同時に、四喜子の視野を通していかなる上海イメージを提示しているのかを考察する。本論の最終目的は、「四喜子底生意」の解読を手がかりに、中国におけるモダニティの問題を考えるとところにある。

1940年代における探偵小説について

池田 智恵

近代に世界的に起きた文化の変動の一部として小説にも変化が生じ、所謂純文学と近代エンターテインメント小説とが誕生した。中国も例に漏れず、純文学としての「五四新文学」と近代エンターテインメント小説として「鴛鴦蝴蝶派」が生まれた。発表者は、研究対象としては、長きに渡り、かえり見られなかった、近代エンターテインメント小説の成立の様相を明らかにする目的のもと、研究を行っているが、その一部として、現在、探偵小説という角度から取り組んでいる。

近代中国において、探偵小説は、清末に、翻訳探偵小説のブームを、1920年代に創作探偵小説のブームを迎えたと言われる。ただし、探偵小説の原稿が集まらずに中国初の探偵小説専門誌『偵探世界』（1922-1924）が停刊に追い込まれる、または、1930年代以降、探偵小説の雑誌での掲載数が減るなど、中国の研究者の一人である湯哲声も『中国現代通俗小説思辨録』（北京大学出版社 2008）で指摘するように、探偵小説は中国で十分に発展を遂げたとは言いがたい。

しかし、1940年代は、実は雑誌の発行だけを考えれば、第二の探偵小説創作ブームと言えなくもない。探偵小説専門誌は、前述の『偵探世界』（全24期）が存在するのみであったが、1940年代には、孫了紅編集の『大偵探』、程小青の編集の『新偵探』、他には『藍皮書』、『紅皮書』等が出版された。また『万象』は探偵小説専門誌ではないが、少なくない翻訳及び創作探偵小説を掲載している。

この年代の探偵小説に関する研究は極めて少なく、その実情はいまだによく分かっていない。そこで、本発表は、この1940年代における探偵小説専門誌を中心とした探偵小説に注目する。1940年代の作品が一体どのようなもので、それ以前の創作からいかなる変化を遂げたのか、遂げていないのかについて考えたい。

これにより中国近代における探偵小説の運命の一端がより明らかになり、中国がいかにか近代的エンターテインメント小説である探偵小説を享受し、創作しようとしたかが明らかになるだろう。